

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00857

研究課題名（和文）地球市民を育てる小学校外国語教育のための教師教育プログラムの構築と普及

研究課題名（英文）Development and Diffusion of the Teacher Training Program to Cultivate Global Citizens in Primary English Education

研究代表者

阿部 始子（Abe, Motoko）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：00449951

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、地球市民育成を目指した小学校外国語教育を具体化するため、欧州評議会が提唱する「民主的文化のための能力」を理論的枠組みとし、日独の小学校における国際協働学習・教科横断的アプローチの実践研究、日独の教員養成大学における国際協働学習の実践研究、現職教員を対象にした研修プログラムの構築と普及を行った。では実践と評価の具体的な方法の提案、では教員養成大学における国際協働学習の事例提示、では主に現職教員を対象にした研修講座を実施した。成果は、学術書1章（英語）、学術論文6本（うち査読有和文2本及び英文2本）、学会発表17件（うち英語6件）、研修講座28回などで国内外で共有された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語教育では、言語技術を向上させる指導方法が焦点化され、言語を包含する文化の扱い方や国際コミュニケーションに不可欠な地球市民性の育成について十分に議論されてこなかった。特に小学校段階での実践例が乏しく、教員研修の機会が絶対的に不足していた中で、本研究では、小学校段階での実践事例を示した、教員養成における国際協働学習の可能性を示した、現職教員を対象に実践方法や教材の開発方法、評価の枠組み等の研修を実施し、継続的に支援するための教師ネットワークの基盤づくりを行ったことは、学術的かつ社会的意義があったと考える。今後研修の動画や資料を公開していくことで、さらなる普及を図りたい。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to provide practical suggestions for elementary school foreign language education aiming at fostering global citizenship. The research employed “Competences for Democratic Culture” as a theoretical framework and aimed to; 1) promote international collaborative learning between elementary schools in Japan and Germany and cross-curricular approaches, 2) promote international collaborative virtual exchanges between teacher training universities in the same countries, and 3) construct and disseminate training programs for in-service teachers for the above-mentioned objectives. To investigate its effectiveness, action research, case studies and questionnaire surveys were conducted. The results were shared domestically and internationally in the form of one book chapter (in English), six academic articles (including four peer-reviewed articles), 18 conference presentations (including six in international conferences), and 28 training workshops/lectures.

研究分野：小学校外国語教育

キーワード：小学校外国語教育 相互文化的市民性 教師教育 教員養成 国際協働学習 民主的文化のための能力
参照枠 地球市民の育成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

小学校英語教育が大きく変化しようとしている中で、言語技術の体系的な指導方法ばかりが議論されて、言語を包含する文化をどう扱い AI 社会に対応した国際コミュニケーションをどうとらえ地球市民をどう育成するのかという十分な議論はされないままであった。その理由は「地球市民の育成」という目標の共有にばらつきがあり(例:単に理論的背景として位置付けるか、実践まで落とし込んだ教育目標としているかの差)特に小学校段階での実践の具体的例示が乏しく、教員研修の機会が絶対的に不足しているため、この理念も実践法も普及する環境が整っていないからであると考えた。

OECD(2015)は、多言語の習熟と共に、初等教育の段階から文化に対する理解を促すことの必要性を指摘している。特に「自分たちが何者であり、世界の他の地域の人々とのようにつながっているかを考えさせることは、幼い頃から始められる。」とし、小学校段階から地球市民としての素地を育む重要性和実現可能性を示している。また、英語はもはや多文化言語(本名, 2015)であるので、文化的影響を受けた英語変種話者同士の相互理解をどう促すかが課題であり、違いを受け入れる寛容さが、このような「多文化言語」である英語を用いる際の必須条件となっていることも示唆されている。Dr. Byram(1997)は、これまでの外国語教育では情報交換や言葉のやりとりのスキルを中心とする“communicative competence”が重視されてきたが、相手の文化的背景や価値観を理解し社会的文脈の中で相互理解をはかる Intercultural Communicative Competence (ICC)の育成が必要であると述べている。これらの指摘は、小学校学習指導要領解説(2017)の「社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり、外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮したりすることが重要である」(p.67)という外国語科の目標と呼応しているかのようだが、具体的な学習内容をみても、表面的な異文化体験にとどまり、ICCの育成には到底不十分な内容しか扱わないことになっており、真に地球市民としての責任や行動を問うような学習課題の提示がない。

2. 研究の目的

これらの課題に対する解決法を探るため、多言語多文化共生社会を目指すヨーロッパの知見を日本に应用できる実践法を探りたいというのが、本研究を立ち上げた動機であった。というのは、日本の英語教育はヨーロッパの外国語教育の枠組みである CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) や教員研修ポートフォリオ E-POSTL (European Portfolio for Student Teachers of Languages) などから大きな影響を受けてきたにもかかわらず、多言語多文化共生のため重要な柱となる相互文化的コミュニケーションを育成することについての体系的な枠組みは輸入されず、実践方法の研究は蓄積がなかった。日本の英語教育においては、「異文化交流」が異文化理解のための中心的活動であるといった記述が散見されていた。本研究では、異文化交流を否定するわけではないが、そのような体験的学習に加えて、世界で何が起きているかを理解し自分が何をすべきかという自覚のもとに行動する地球市民としての資質、つまり Dr. Byram (2008) が提唱する Intercultural Citizenship を、こうした資質形成の重要なスタートである小学校段階から外国語教育を通して育成するための体系的な実践プログラムとそれを普及させるための教員研修プログラムの構築を目的とした。

このために「相互文化的コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence: ICC)」を理論的背景の軸にして、この分野で最も先進的な Durham University で理論研究を進め、帰国後教員研修プログラムの構築と普及を目指すことを目的とし、以下の問いを設定した。

学校でのフィールドワークのデータを国際比較し、Durham University で学んだ ICC の理論的枠組みをもとに、日本の現状に合った地球市民の育成を目指した新しい小学校外国語教育の方向性と実践方法は何か

イギリスの小学校 (St. Margaret's C.E. Primary School, Durham, UK. を予定) で実際に子どもたちの ICC は外国語教育を通してどのように育成されているか

のデータと応募者の上記 2015 - 2018 年度の基盤研究で収集した南アルプス子どもの村小学校でのフィールドワークのデータを国際比較し、Durham University で学んだ ICC の理論的枠組みをもとに、日本の現状に合った地球市民の育成を目指した新しい小学校外国語教育の方向性と実践方法は何か

を普及させるための体系的な教師教育プログラムは何か

この教師教育プログラムが効果的に機能する(普及・継続)ためにはどうしたらいいか
教師教育の継続的なサポートを実現するため「地球市民の育成を目指した(小学校)外国語教育教師ネットワーク: Association of Intercultural Citizenship through Language Education=AICLA network」は機能するか。

3. 研究の方法

当初は 2020 年 4 月 ~ 2021 年 3 月まで研究専念期間を取得し、イギリスの Durham University の Dr. Michael Byram 及び Dr. Prue Holmes の指導を受けることを計画した。Dr. Holmes は、

ICC を提唱した Dr. Byram (同大名譽教授) の後継者で、Dr. Byram から直接推薦された人物である。しかし、コロナパンデミックの影響を受けこの期間での渡英は不可能となり、計画通りの 1 年間というフィールド調査はできなかったが、2022 年 3~4 月の約 3 週間 Durham University に visiting scholar として滞在することができ、ICC 関連資料の収集及び Valley Road Academy (Sunderland, U.K.) でのフィールド調査を実施することができた。また、オンライン国際学会などを通じて Dr. Martyn Barrett (University of Surrey 名誉教授) から指導を受ける機会を得、ICC に変わる新しい「民主的文化のための能力参照枠 (Reference Framework of Competences for Democratic Culture: RFCDC)」の存在を知った (ICC を提唱した Dr. Byram も RFCDC の開発に携わった)。Dr. Barrett はこの参照枠の提唱者であると同時に、児童心理学分野での素晴らしい功績を有していることから児童用記述文の開発にも深くかかわった人物である。Dr. Barrett から直接指導を受けたこと、また彼が主催する勉強会でドイツの研究者 Dr. Raphaelle Beecroft (Karlsruhe University of Education, Germany) と共同研究する基盤を作り、小学校と大学 (教員養成) という二つの異なる校種での国際協働学習に関する実践研究を継続して行うことができた (詳細は成果 1・2 に記載)。

また、2021 年度からは、地球市民を育てる小学校外国語教育のための教員研修プログラムの構築のために東京学芸大学で現職教員研修講座を開催した。また、その有用性を評価するためのアンケート及びインタビュー調査を行った。また、教師教育の継続的なサポートを実現するため「地球市民の育成を目指した小学校外国語教育教師ネットワーク: Intercultural Citizenship Education through Primary EFL Teaching: ICCEPET」という勉強会を開催した (詳細は成果 3)。

4. 研究成果

本研究の成果は主に 3 分野にわたる。地球市民 (相互文化的市民性) の育成を目指した小学校外国語教育を目指し、欧州評議会が提唱する「相互文化的コミュニケーション能力: ICC」及び「民主的文化のための能力: RFCDC」を理論的枠組みとし、(1) 日独の小学校における国際協働学習・日本の小学校における教科横断的アプローチの実践研究、(2) 日独の教員養成大学における国際協働学習の実践研究、(3) 現職教員を対象にした研修プログラムの構築と普及である。

(1) 小学校での国際協働学習の実践研究: 日独の国際協働学習・教科横断的アプローチ

上記した Dr. Beecroft は小学校外国語分野の教員養成に携わり、かつ小学校でも Japan Club という放課後クラスで教えていたことから、まず日独の小学生が交流しあう機会を設けた。その後、RFCDC をカリキュラム開発・評価に活用して、単なる国際交流で終わるのではなく、地球的課題 (戦争と平和: ドイツに避難したウクライナ難民にできること/ 環境: プラスティックゴミ問題解決のためのアクション等) について両国の子どもたちが同じテーマ・教材で学び、アクションを起こすことを目標とした実践研究を行った。結果、小学校段階でも国際協働学習は十分可能であること、RFCDC という共通の枠組みを活用することでカリキュラム開発及び評価のプロセスが明確化され児童・教師にとって有用なリソースであり、他国・地域との国際協働学習に発展しうることなどが明らかになった。RFCDC の児童版ポートフォリオは日本語に翻訳し欧州評議会のホームページで公開されている (阿部, 2022; <https://book.coe.int/en/human-rights-democratic-citizenship-and-interculturalism/11420-pdf-a-portfolio-of-competences-for-democratic-culture-young-learners-version-japanese-version.html>)

また、このアプローチを東京学芸大学附属小学校の留学生との交流にも発展させることを試みた。ガーナからの留学生と共に、持続可能な食料分配、食品廃棄問題、地産地消 (ガーナの食材でできる日本食の提案など) について、外国語だけではなく総合的な学習の時間や道徳といった教科領域を結び付けた他教科連携プログラムを開発した。子どもたちの学びが母語で補完されることでより深くなり、興味関心の分野に広がりが見られることが示唆された。

その成果は、学術論文 3 本 (Abe & Beecroft, in press; 阿部他, 2023、阿部他, 印刷中) 学会発表国内 3 件 (阿部, 2023; 阿部・中村, 2023, 2022; 阿部, 2024: 招待講演) 国外 2 件 (Abe & Beecroft, 2023, 2022) などを通じて、国内外で共有された。

(2) 日独の教員養成大学における国際協働学習の実践研究

教員養成大学で小学校外国語教育を専攻する日独の大学生が、「子ども中心の授業づくり」「理想の共生社会にむけた学校づくり」「地球的な課題解決のための自己実験」などをテーマに国際協働学習を行った。この実践研究は当初の研究計画にはなかったのだが、Dr. Beecroft との共同研究の中で、教員養成段階で ICC/CDC を育成することの重要性を再確認し、カリキュラム・リソースの共有が容易にできる環境を活かして、継続的に実践研究を重ねた。結果、単なる国際交流で終わった実践とテーマ・課題を共有した実践とでは、参加者の意識が明確に異なること、同じ専攻・将来への方向性 (教員になる) を持っても、異なる文脈から受ける影響を意識化することで (例: 共生社会の定義・地球的課題解決の取り組み・社会に埋め込まれた価値観などが文脈により異なる) ICC/CDC の育成に好影響を与えることなどが示唆された。

その成果は、学術書の 1 章 (Abe & Beecroft, 2023) 学術論文 2 本 (阿部, 2024; Abe & Beecroft,

2023)・国外学会発表3件(Abe & Beecroft, 2023, 2022, 2021)などを通して特に海外の研究者・実践者と共有された。

(3) 現職教員を対象にした研修プログラムの構築と普及

本研究の最大の目的であるこの分野については、2021年度から2023年度にわたり開催した東京学芸大学現職教員研修講座全20回が軸となった。2021年度は1日のオンラインワークショップを2日間、2022年度からは午前と午後でテーマを変えて、夏期に4回行った。ここまでの教員研修は授業体験や授業資料の共有が中心であったが、参加者のICを育成するという意味では効果がうすいのではないかと考え、2022年度春期からは「地球市民を育成する小学校外国語教育 先生の相互文化的コミュニケーション能力を育てるオンラインワークショップ」とタイトルを変え、ICに関連するテーマを小学校外国語の授業で扱うキーフレーズと関連付け、参加者同士のディスカッションやアイデア共有の時間を設け、理論と実践が往還する・参加者自身の振り返りが促されるように工夫した。詳細は以下の通りである。

		日付	時間	講座タイトル		概要	人数		
1	2021年度夏期	8/5	10:00-16:00	地球市民を育てる小学校外国語教育の授業	相互文化的コミュニケーション能力の育成	「地球市民を育てる」ことを目指して、国際理解教育の内容を取り入れた小学校外国語教育の目的・授業内容・評価について、オンラインでのワークショップ形式	17		
2		8/6	10:00-16:00		SDGsと小学校英語		16		
3	2022年度夏期	8/5	10:00-12:30	地球市民を育てる小学校外国語教育：授業体験オンラインワークショップ	相互文化理解を促す授業体験	授業体験WSでは、相互文化理解を促す授業と、SDGsや他教科連携を意識した授業が体験できる。	27		
4			13:30-16:00		SDGsや他教科連携を意識した授業体験		25		
5		8/9	10:00-12:30	地球市民を育てる小学校外国語教育：授業力アップオンラインワークショップ	何を育てる？「地球市民の資質」とは？	授業力アップWSでは、地球市民の資質とは何かを考え教材選びやカリキュラム構成の考え方、授業の進め方等実際の授業に役立つ知識やスキルを体験を通して身につける。	20		
6			13:30-16:00		どうやって育てる？：教材選び・カリキュラム構成・授業の進め方		24		
7	2022年度春期	2/23	10:00-12:30	先生の相互文化的コミュニケーション能力を育てるオンラインワークショップ	WS 1 This is ME! 自分という「文化」を見つめ、客観化する力をつける	1)Let's think! (テーマについての資料提示のあとグループでディスカッションをする) 2)Let's learn! (テーマについての講義で理解を深める) 3)Let's watch! (映像や視覚資料をもとに、テーマについてより深く理解し、グループでディスカッションをする) 4)Let's make your lesson! (テーマに沿った単元構成の仕方や授業の進め方をグループでディスカッションする)	20		
8			13:30-16:00		WS 2 Welcome to Japan 自(国)文化を見つめ、批評的に振り返る力をつける		14		
9		3/21	10:00-12:30		WS 3 Where do you want to go? 文化とは何か？文化を多面的にとらえ、授業でどのように扱うかを考える		14		
10			13:30-16:00		WS 4 What do you have on Monday? 学校文化のエトセトラ・異文化理解を促す土壌づくりについて考える		18		
11		3/28	10:00-12:30		WS 5 We all live on the Earth. 地球市民として地球的課題に取り組む姿勢や態度を身につける		20		
12			13:30-16:00		WS 6 What do you want to be? 社会・世界の中で生きるための役割について考える		20		
13		2023年度夏期	8/10		10:00-12:30		WS 7 What do you want to watch? オリンピックに参加する多様な背景の人たちについて考える	以上4つアクティビティーで構成され、理論と実践が往還するように工夫した。	29
14					13:30-16:00		WS 8 This is my town. 社会の中で多様な背景を持つ人との共生を考える		22

15		8/25	10:00-12:30	WS 9 What would you like? 食文化の多様性と共通性について考える	12
16			13:30-16:00	WS 10 Let's think about our food. 食を通して見えてくる地球的課題について考える	15
17	2023年度 春期	2/23	10:00-12:30	WS 11 My Summer Vacation 多様な休暇や学校行事とその背景にある文化について考える	9
18			13:30-16:00	WS 12 She can sing well. It can jump high. 「できること」を多角的にとらえる	9
19		3/24	10:00-12:30	WS 13 I want to visit there! ICTを活用して異文化理解を促す	22
20			13:30-16:00	WS 14 I want to try it! VR(Virtual Reality)を活用した語学教材を体験する	21

参加者を対象にしたアンケート結果（4件法：役に立った4・全く役に立たなかった1）からは、平均3.5以上の数値を得、研修内容が役に立ったという感想を持っていることが示唆された。また参加者を対象にしたインタビューからは、講義やWSだけではなく参加者同士のディスカッションやアイデア共有によって満足度が高まっていることも示唆された。

こうした蓄積で「研修プログラムの構築」はある程度達成できたので、「研修プログラムの普及」に向けて2022年度から開催した「先生の相互文化的コミュニケーション能力を育てるワークショップ」全14回の動画と資料を東京大学現職教員研修講座ホームページで配信する予定である（2024年7月から）。

また「地球市民を育成する小学校外国語教育」のテーマで2021年から2023年にかけて、以下の通り学外での研修を実施し、上記の講座参加者以外にも普及する機会を得た。

	日時	場所	主催	タイトル
1	2021年 7月4日	オンライン	日本児童英語教育学会 (JASTEC)	国際理解教育の視点から考える「深い学び」と教科書の具体的な活用法
2	2021年 11月1日	オンライン	四天王寺大学	地球市民を育てる小学校外国語教育の授業 - 相互文化的コミュニケーション能力の育成 -
3	2022年 11月5日	オンライン	関東地区私立小学校教員 研修会	地球市民を育てる小学校外国語教育： 相互文化的能力を育む授業
4	2023年 2月9日	オンライン	東柏ヶ谷小学校英語専科担当教員 研究授業・研究協議会	小学校外国語教育に国際理解の学びを
5	2023年 3月29日	文教大学	ELEC 同友会英語教育学会	『世界とともに生きる子どもたち』を育てる 小学校外国語教育
6	2023年 7月4日	国立音楽大学 附属小学校	東京私立初等学校協会	地球市民を育てる小学校外国語教育： - なぜ必要？どうやってやるの？ -
7	2023年 7月29日	溝口公民館 (鳥取)	鳥取県国際理解教育研究会	地球市民育成を目指した小学校外国語教育 - 国際理解教育と外国語教育を結び -
8	2023年 8月4日	横須賀市教育 研究所	横須賀市小学校外国語教育・国際教育研究会	国際理解・異文化理解の視点を取り入れた授業 - 児童の思考をより促すような学習内容にするために -
9	2023年 8月22日	暁星国際流山 小学校	暁星国際流山小学校	地球市民を育てる小学校外国語教育 なぜ必要？ 必要な資質は？ 必要な環境は？ どうやって育てる？

もう一つの普及手段として、「地球市民の育成を目指した小学校外国語教育教師ネットワーク: Intercultural Citizenship Education through Primary EFL Teaching: ICCEPET」という教員同士のネットワークを促し、こうした考え方を共有し授業づくりを支援する勉強会を2022 - 2023年度にかけて計10回開催し、延べ約150人が参加した。

以上のことから、目的の欄に記した問 についてはコロナパンデミックの影響を受けたが、小学校外国語教育における地球市民の育成を目指した実践方法の提示、教師教育プログラムの構築、普及・継続のための体制作りと、効果的なネットワークは、おおむね達成できたといえるだろう。加えて、当初予定していなかった新しい理論的枠組み RFCDC と出会い、その提唱に深くかかわった Dr. Barrett からの指導を受け、Dr. Beecroft との日独の国際共同研究に発展させることができたのは、本研究における新たな収穫であった。

これもひとえに、本助成を受けることで、様々なフィールドで実践研究を継続することができたおかげである。また研究を支えてくださった大学関係者、共同研究者、リサーチに協力してくださった児童・大学生、研修に参加してくださった先生方、家族に、深く感謝の意を表したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Abe, M. and Beecroft, R.	4. 巻 25
2. 論文標題 Experiencing the 'in-between' through telecollaboration: Creating "ideal inclusive schools" in multicultural pre-service English teacher-teams	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Intercultural Communication	6. 最初と最後の頁 125-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村香 阿部始子 青柳有季 大里信子 荻原真也 澤井亜美 林正太	4. 巻 50
2. 論文標題 小中外国語（英語）教育における連携カリキュラムの開発 留学生との交流を通じた連携カリキュラムの実践及びこれまでの研究成果と課題の検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京学芸大学附属学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Abe, M. & Beecroft, R.	4. 巻 Special Issue
2. 論文標題 Fostering Primary Students' Competences for Democratic Culture in EFL: The PEACE project	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Language Teaching for Young Learners Journal	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 阿部始子	4. 巻 5
2. 論文標題 「異なり (Strangeness)」を体験することで自己発見・他者理解を促す異文化交流 自分のcomfort zone から踏み出す国際協働自己実験 (self-experiments)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 メディア情報リテラシー研究	6. 最初と最後の頁 73-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部 始子・中村 香・齊藤 和貴・遠藤 信幸	4. 巻 42
2. 論文標題 外国語科と総合的な学習の時間を結ぶ探究的な実践研究 Let ' s think about our food. の単元を SDGs と関連付けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本児童英語教育学会 (JASTEC)研究紀要	6. 最初と最後の頁 273-288
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部 始子・齊藤 和貴・中村 香・遠藤 信幸	4. 巻 43
2. 論文標題 小学校外国語と総合的な学習の時間との 教科横断的アプローチを探る実践研究 SDGsをテーマにして	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本児童英語教育学会 (JASTEC)研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 阿部始子 中村香
2. 発表標題 SDGsをテーマにしたLet ' s think about our food.の発展的授業 - 「総合的な学習の時間」などとの効果的な教科横断的アプローチを探る実践研究 -
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第 42 回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 小学校外国語教育を通して地球市民を育てる国際的な試み-日本とドイツの小学生を結ぶ国際協働アクションリサーチ-
3. 学会等名 第22回小学校英語教育学会(JES) 四国・徳島大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Motoko ABE and Raphaelle BEECROFT
2. 発表標題 An International Comparative and Collaborative Study to Develop Primary Students' CDCs in EFL-Focusing on Curriculum Design and Implementation-
3. 学会等名 IALIC (International Association of Language and Intercultural Communication) 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Motoko ABE and Raphaelle BEECROFT
2. 発表標題 Experiencing the 'in-between' through telecollaboration: Creating "ideal inclusive schools" in multicultural pre-service English teacher-teams
3. 学会等名 SIETAR (Society for Intercultural Education Training and Research) 2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 国際理解教育の視点から考える「深い学び」と教科書の具体的な活用法
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第41回全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部始子・中村香
2. 発表標題 小学生は異文化体験を通して何を学んだか CEFR と相互文化的能力による分析と教科としての新しいカタチの提案
3. 学会等名 第21回 小学校英語教育学会 (JES) 関東・埼玉大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Motoko ABE・Raphaelle BEECROFT
2. 発表標題 Collaborative Exchange of Pre-service Teachers of English in Japan and Germany: Analysis by AIE and RFCDC
3. 学会等名 36th SIETAR Japan Conference (第36回異文化コミュニケーション学会年次大会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 子どもたちの"どうして英語を学ぶの?"に向き合う小学校外国語教育 - 国際理解のツールとしての外国語をどのように教えたらいいか -
3. 学会等名 小学校外国語授業づくり研究会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Motoko Abe
2. 発表標題 Intercultural Communicative Competence of Elementary School Students in a Japanese EFL Context-Students' Narratives on Curriculum and Their ICC Development-
3. 学会等名 The 2020 Research Informed Practice in Education Network Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 小学校外国語科検定教科書で「地球市民」の資質育成についてどのように取り上げているか - 相互文化的市民性(Intercultural Citizenship)の教育を枠組みに -
3. 学会等名 ESTEEM(小学校テーマ別英語教育研究会)2020年7月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 国際理解教育を取り入れた小学校外国語科の実践研究 これからの外国語教育の目的（Global Competenceの育成）を見据えて
3. 学会等名 ESTEEM（小学校テーマ別英語教育研究会）2020年11月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 深い学びを促すために：児童の実態を踏まえた教科書の効果的な活用
3. 学会等名 児童英語教育学会（JASTEC）第41回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 日本とドイツの小学生を結び地球市民を育てる小学校外国語教育の試み RFCDC児童版を活用した国際協働アクションリサーチ
3. 学会等名 日本国際理解教育学会 第 32 回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阿部始子・中村香
2. 発表標題 小学校外国語と総合的な学習の時間との教科横断的アプローチを探る実践研究
3. 学会等名 第23回小学校英語教育学会（JES）近畿・京都大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Motoko ABE and Raphaelle BEECROFT
2. 発表標題 Employing asynchronous virtual exchange to promote democratic competences in primary EFL: An international comparative action-research study
3. 学会等名 2023 IAIE conference Children as Peacemakers in Divided Societies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Motoko ABE and Raphaelle BEECROFT
2. 発表標題 Engaging with Strangeness through Intercultural Self-Experiments in Germany and Japan -Finding Alternative Countermeasures Against Global Crises by Stepping out of One's Comfort Zone-
3. 学会等名 IALIC (International Association of Language and Intercultural Communication) 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 阿部始子
2. 発表標題 日本とドイツの小学生が取り組む国際協働 - 「平和」「環境」をテーマに -
3. 学会等名 新英語教育研究会2024関東ブロック研究集会 (招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Motoko ABE and Raphaelle BEECROFT	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer Singapore	5. 総ページ数 343
3. 書名 The Development of an Elementary English Teacher Identity: Reflections on a Telecollaborative Exchange Between Pre-service English Teachers in Japan and Germany In Egitim, S.& Umemiya. (Eds.). Leaderful Classroom Pedagogy Through an Interdisciplinary Lens -Merging Theory with Practice- 323-342.	

1. 著者名 Abe, M. & Beecroft, R.	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer Singapore	5. 総ページ数 342
3. 書名 The Development of an Elementary English Teacher Identity: Reflections on a Telecollaborative Exchange Between Pre-service English Teachers in Japan and Germany. In Egitim, S. & Umemiya, Y. (Eds.) Leaderful Classroom Pedagogy Through an Interdisciplinary Lens -Merging Theory with Practice-. 323-342.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Reference Framework of Competences for Democratic Culture: RFCDCの児童版ポートフォリオは日本語に翻訳し欧州評議会のホームページで公開されている
(阿部, 2022; <https://book.coe.int/en/human-rights-democratic-citizenship-and-interculturalism/11420-pdf-a-portfolio-of-competences-for-democratic-culture-young-learners-version-japanese-version.html>)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ピークロフト ラファエル (Beecroft Raphaele)	カールスルーエ教育大学・Karlsruhe University of Education	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ドイツ	Karlsruhe University of Education		